

新型コロナウイルスの感染が拡大する中、山陽新聞では2月の社説だけで7度も題材に取り上げられていた。感染拡大に関する問題が、私たちの日々の生活を侵しつつあることを伝えている。特に、全国の小中高への休校要請（2月28日付朝刊）以降、子どもがいる家庭へのセーフティネットの脆弱さが改めて露呈する事態となっていることに、私たちは目をそらしてはならないであろう。

山陽新聞を^で読んで

川崎医療福祉大講師 直島克樹



親家庭における非正規労働者の割合も高いことが特徴である。同時に、働いていても収入が上がり、ワーキングプアの状態にあるひとり親世帯の割合も高いことが、今後の収入・雇用保障などに関する政策はまだまだ流動的であるがゆえ、親自身も不安に揺れてしまうことがある。子どもたちの不安が積み重なってしまっても当然ある。そういった親の不安は、子どもたちにもつなげていくことが考えられ、繰り返しになるが、

子どももの不安に寄り添って

この不安は決して心の弱さとかではなく、社会における多様な子育て世帯のセーフティネットの脆弱さに起因している。子どもも少なくなっていることが大きい。山陽新聞では、その点を政治・行政に今こそ強く提起していかねばならない。そして、感染対

割合も、先進国の中ではトップクラスに高くなっている。そもそも家庭自体の不安や困難さの度合いが高い家庭に、さらなる困難が連鎖する事態が危惧される。

もちろん、今回の休校措置によって全てのひとり親が困っているわけではないし、両親がそろっていても、

学校や児童保育などでの受け入れはあ

「山陽新聞を^で読んで」は月2回、日曜日に掲載します。